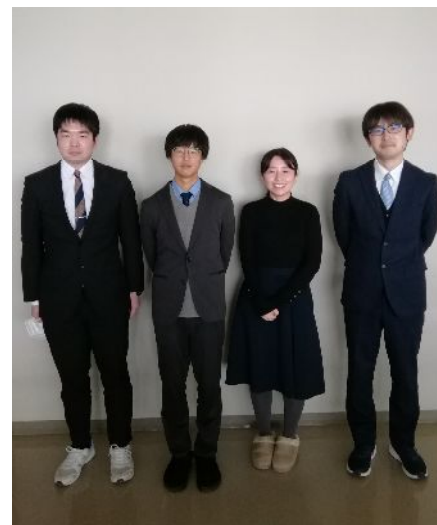


三木高校は今年、創立25年目を迎えました。送り出した卒業生は3,500名を超え、社会のいろいろな分野で活躍しています。そして本校にも、今年度、4人の同窓生が勤務しています。思い出深い母校に教員として帰ってくるのは幸せなことです。彼らからも後輩の指導に全力を尽くそうとする意気込みが伝わってきます。

創立4半世紀の年に4人の同窓生が教壇に立っているめぐり合わせに不思議さを感じたこともあって、高校時代の思い出を挙げてもらいました。

A先生、「文化祭のMグラ」。クラスで話し合いを重ね作品を仕上げていく達成感を得ることができたそうです。B先生、「少人数授業」。教室に常に生徒同士で教え合う雰囲気があったそうです。「一人ひとりが個性豊かでいながら、お互いを尊重し合っていて、自分らしくのびのびと学校生活を送れた」と当時を懐かしむ先生もいました。

B先生は、3月から「生徒の生徒による生徒のための授業」を始めました。これは、グループで協力して創り上げていく生徒主体の授業です。自分の行動に責任を持ち主体的に取り組む「自主・自律」、お互いが切磋琢磨しながら高め合う「友愛」。本校の校訓は、これまでの25年確かに守られてきました。これからの25年も形を変えながら受け継がれていくことと思います。



同窓生カルテット

【人権・同和教育ホームルームについて】

全日制

1年次生 「アイヌ民族と多文化共生を考える」

アイヌ民族は日本列島における先住民族です。2年時に修学旅行で北海道を訪れることもあり、アイヌ民族の歴史や文化について理解し、いまだに残る差別を解消する方法について考えました。

（生徒の感想）「自然を神（カムイ）として敬い、共に生きていこうとするアイヌの精神は素晴らしいものだと感じました。違いを受け入れて新しい考え方を生み出せるよう意識したいです。」



（修学旅行で訪れる予定の『ウポポイ』）

2年次生 「水平社宣言から学ぶ」

2016年に成立した、部落差別解消推進法に示されているとおり、部落差別は現在もなお存在するとともに、情報化の進展に伴って状況に変化が生じています。ホームルームでは、『水平社創立宣言』に込められた理念を知り、人権確立のために大切なことについて考えました。

（生徒の感想）「自分の住む地域の文化や歴史に誇りを持つことさえできない状況に置かれていたことや、差別を恐れることで様々な可能性が奪われていたことを知り、必ず変えていかなければならないと思いました。」

大正十一年三月

水平社

綱 領

一、特殊部落民は部落民自身の行動によって絶対の解放を期す

一、吾々特殊部落民は絶対に経済の自由と職業の自由を社会に要求し以て獲得を期す

一、吾等は人間の原理に覺醒し人類最高の完成に向つて突進す

宣 言

全國に散在する吾が特殊部落民よ團結せよ。

長い間虐められて来た兄弟よ、過去半世紀間に種々なる方法と、多くの人々によつてなされた吾等の爲めの運動が、何等の有難い効果を齎らなかつた事實は、夫等のすべてが吾々によつて、又他の人々によつて毎に人間を昇進されて来た例であつたのだ。そしてこれ等の人間を動かすの如き運動は、かつて多くの兄弟を堕落させた事を想へば、此際吾等の中より人間を尊敬する事によつて自ら解放せんとする者の集團運動を起せば、寧ろ必然である。

兄弟よ、吾々の祖先は自由、平等の烙印者であり、實行者であつた。陋劣なる階級政策の犠牲者であり男らしき産業的労働者であつたのだ。ケモノの皮剥く部類として、生々しい人間の皮を剥取られ、ケモノの心臓を裂く代價として、生々しい人間の心臓を引裂かれ、そこへ下らない嘲笑の唾を吐きかけられた呪いの夢のうちに、なほ誇り得る人間の血は、漏れずにあつた。そうだ、そして吾々は、この血を擧げて人間が神にかゝつた時代にあつたのだ。犠牲者がその烙印を投げ返す時が来たのだ。殉教者が、その前冠を脱ぎ去る時が来たのだ。

吾々がエタであること誇り得る時が来たのだ。

吾々は、かならず卑屈なる言葉と性懦なる行爲によつて、祖先を辱しめ、人間を冒瀆してはならぬ。そして人の世の冷たさを、何んなに冷たいか、人間を動かはる事が何んであるかをよく知つてゐる吾々は、心から人生の熱と光を願求禮讃するものである。

水平社は、かくして生れた。

人の世に熱あれ、人間に光あれ。

定時制

1年次生

1F・1S組合同で実施しました。「さまざまな差別」というテーマで、DVD「ほんとの空」を視聴した後、日常生活に潜む、思い込みや偏見から生まれる人権課題について考えました。また後半では、法務省の定める主な人権課題の16項目について取り上げ、依然として存在している差別意識(心理的差別)の解消に向けて、わが国ではどのような取り組みがなされているかを学びました。現在問題となっているさまざまな差別について、正しい知識の習得と現状を把握することの大切さを学び、自分には何ができるかを考えることで、しっかりした人権感覚を身につけ、適切に判断し行動できるようになることを目標に学習しました。生徒の感想では「正しい知識を得て、冷静で客観的な視点を持ちたい」という意見が多くみられました。

2年次生

「同和対策審議会答申を学び、今なお存在する部落差別を考える」というテーマで実施しました。同和問題を解決することは「国の責務であり国民的課題である」ことを強調するとともに、同和対策事業によって同和地区の生活環境は大きな改善が見られたにもかかわらず、今なお解消されないところに「心理的差別」が存在していることを説明し、真に差別のない社会の実現のために何ができるかを考えました。最後にDVDを視聴して、これまでの学習を振り返るとともに、被差別部落出身の同世代の若者の声を知り、改めて現代の解決すべき問題としてとらえました。



昨年8月、ある高校で新型コロナウイルスによるメガクラスターが発生しました。その時一体、どのような事態が待ち受けていたのでしょうか？学校で定期購読している冊子に、その困難に立ち向かった高校の取り組みが掲載されていたので印象に残った部分を紹介します。(県名・学校名を伏せています)

今年8月、本校は新型コロナウイルスによるメガクラスターの危機に直面しました。国内最大級と称されたメガクラスターは全国的に報道されて大きな衝撃を与えることとなりA県でも未曾有の出来事として取り上げられたのです。発生時にはA県の医療統括監から「これは災害レベルです。長期戦を覚悟してください」という言葉をいただき、長期対応に備えた災害対策の意識をもって当たることとなりました。

【誹謗中傷に晒される学校と生徒】

8月11日の深夜0時に記者会見を開き、その内容が朝から新聞・テレビ・ネットニュースで報道されたのを契機に、学校に対して抗議や誹謗中傷の電話が殺到しました。なかには「日本から出ていけ!」、「学校を潰してくれ!」など心無い言葉も学校に寄せられました。またネット上のプライバシーの侵害も発生しました。メガクラスター発生と同時にプライバシーの保護と誹謗中傷防止の観点から、広報ツールの全てを凍結しました。予想通り、すぐにネット上で生徒の写真が検索され続け、犯人探しが始まったのです。

【支援の広がりネットの影響】

外出自粛期間中は、生徒たちは携帯でネットばかり見る傾向があります。そのため、・・・ネット上での偏見や差別・誹謗中傷を目にする機会が増えていたと思います。直接学校に来る偏見・差別・誹謗中傷・人権侵害は生徒から遠ざけることができましたが、ネット上のニュースや書き込みから生徒や保護者を防衛できない状況があることを痛感しました。

しかし、こうした苦しみの時期に転機が訪れます。それは元サッカー日本代表の本田圭佑さんの応援メッセージでした。その後も、B高校サッカー部はじめ多くの応援メッセージが寄せられ始めました。ネット上の偏見・差別・誹謗中傷に防波堤を設けることはできませんが、自粛生活の生徒を助けたのもネットニュースや励ましや応援のSNSでした。

心の中に偏見・差別に対する敵対心や不安感を増すのではなく、支援や励ましに対する感謝や恩返しの気持ちを増やして、心を前向きに希望で満ちるようにと心掛けて指導した。支援や励ましは心のワクチンとも言え、感謝や恩返しは心の免疫力もなり得る。